

木村文助研究

通信 19号 2009・5・7

木村不二男著「父の肖像（木村文助）」掲載本戴く

二月三日、隣町七飯町峠下に住む郷土史家長川清悦氏宅を訪れた。長川氏が大野地区で講演した際、資料をお借りし返す為玄関へ入ると愛犬と愛猫も出迎えてくれた。新大野町史執筆では幾度かお話を伺い興味深い話でいつも刺激を与えてくれる。

大野地区と隣接する峠下は行政的にも歴史的に（箱館戦争など）かかわりが深い。

郷土史談義も時間が経ち、お暇しようとすると「木下さん、これ差し上げるから資料館へ持つてくれ」と書棚から取つて渡されたのが「北海道生れの作家」の本であった。木村文助の子息不二男氏の著書でバラバラめく男氏と親交があり持つていた本だ。全く予想しない事で、来てよかつたと思つた。謝意を述べ雪に包まれた長川宅を離れた。

本を紹介すると不二男氏は森町上台在住、昭和四五年発行・二一〇ページ・発行所（山音文学会・豊浦町）六八〇円である。「父の肖像（木村文助）」は最後の項で三四ページが盛られ綴り方指導者というよりも家庭人父を語つている。

早速市郷土資料館佐々木学芸員に目を通してもらい「赤い鳥・木村文助」コーナーへ収めてもらいた。木下寿実夫

北海道生れ
の作家

木村不二男

○八 一〇・三〇 文保研が北海道文化財保護 功労賞を受賞・道文保協

一一・一 同記事「文化情報」310号掲載

一一・六 「木村文助研究」通信No.1

8号発行

二二・三 北斗市教育広報「きらめき」No.11 連載「赤い鳥」に載った郷土の作文「馬鹿はつ子」（大野小尋五吉田孫七）

一二・八 函館高津教諭、郷土資料館「赤い鳥・木村文助」コーナー来館

一二・一〇 演出家中村勝男氏、北斗市郷土資料館「赤い鳥・木村文助」コーナー来館

一二・一〇 函館市民才ペラ事務局前田治氏、北斗市郷土資料館「赤い鳥・木村文助」コーナー来館

一二・一〇 七飯町長川清悦氏より「北海道生まれの作家」（木村不二男・昭和四五年刊）を北斗市郷土資料館へ寄贈

一二・一九 偉人テーマに合唱劇 来年の初演を目指す 大野小「生活つづり方」指導——元校長・木村文助「北海道新聞」

一二・一五 オリジナル合唱劇挑戦 偉人木村文助テーマに「函館新聞」の作文「どう猫」（大野小高・松原トヨ）

一二・一八 「木村文助の足跡」リーフレット作成

三四・二八 合唱劇実行委員会・コーナーで行う・八名

「昭和の思い出」「村の子供」を手にして杉木ムツ氏投稿合唱劇実行委員会・市内



木村文助テーマに合唱劇挑戦

合唱劇実行委員会

今年に入り、役所に所用があり赴くと実行委員会（熊本昇委員長）事務局長の前田治氏に呼び止められた。実は今まで既成の題材に挑戦してきたが地域の題材を取り上げ木村文助・綴り方をテーマにしたいとのこと。賛成だし大いに協力するよと返事した。

その後郷土資料館「赤い鳥・木村文助」コーナーに前田氏（市内茂辺地在住）と演出家の中村勝雄氏（市内向野在住）は二度ほど訪れ資料、テープ等を受け取って帰った。

この取り組みは地元新聞に大きく報じられた。

中村氏は原稿用紙三八枚に及ぶ脚本のたたき台を一気に書き上げ第一回の実行委員会に提出した。

「木村文助の『綴り方教室』」と題し

第一幕 文助と村の子供 オラ、学校の先生になりてエ（ほぼ史実に基づいて半分以上の枚数を割いて描かれている。）

第二幕 スズ子の手紙 桜の花の散る頃までに

（フィクションで木村先生と成長した少女とのかかわりが載る。）

第二回目の実行委員会は、主題は何か、木村先生は何を伝

えようとしたか、綴り方をどう載せていくか、主題とのかかわりで表現はどうなのが、一幕と二幕とのインパクトの違い、種々論議された。

事務局からその後の作曲家との経過、合併五周年を目指して発表に漕ぎ着けたい、脚本は今秋には完成させたい、などまとめがあつた。

木下寿実夫

綴り方の活用を

大野のつづり方は一六八点残っている。学校教育、放送、読み聞かせなど活用していただければ幸いである。

大正から昭和に掛けての大野の文化、村、家庭など素直な文で書かれ感動を与えてくれる。「赤い鳥」に載つた文は一編ずつ教育広報で紹介されている。

資料館に文保研作成のコピー用資料を備えているので活用できる。



連載『赤い鳥』に載つた郷土の作文

大正から昭和の初めにかけ、童話作家・鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小児童の作品を紹介します。大野小は当時、木村文助校長が子供たちの綴方（作文）や絵などを投稿し次々と入選。「日本一の綴方学校」といわれました。

食ばん

（北海道教育史掲載）

大野小尋六 金川 重雄

僕が丁度三年生の時で、それははんだんきやう（はたんきよ）のたくさんなった年の七月の日であつた。

もう十三日にも近いので、母

さんと二人で墓の草取りに行つて來た。帰つて來ると、姉さんたちと同級生の横山さんが、「金川さんの母ちゃん、はんだんきやうを少し分けてくれられないんでしようか」と言つた。母は

「今なくなるところだが、まだ少しあるから、後から重雄さ持ちさせてやります」と言つたら、横山さんは帰つた。母は手かごを持つて、烟に行つてもどつて來た。そして「重雄、これなあ戻りに（帰る時に）、ぜんこ（お金）よこしたら、これ、もうし

まいで少ししかないから、くれる」と言つて來い」と言つた。

僕は「うん」と言つて、手かごを持って家を出て、途中考えた。今、横山さんに行つて、はんだんきやうの錢十錢だと言つてもらつて來て、何か買つて食べよう、と思ひきめてしましました。

ふと気がついて見ると、そこ

は横山さんの家の前であつた。

「ごめん下さい。はんだんきやう持つて来ました」と言うと、

奥から出て來たので、手かご

ままやりました。すると「いく

らあげればよいの」と言つたか

ら「十錢」と言いました。そし

て手かごと十錢を持って來た。

そして途中で食ばんを十錢買つて、店を出ようとすると、丁度

姉さんが局（郵便局）からの帰

りで、僕の方をぎろつと見た。

僕は今買つた食ばんを後ろにか

くした。すると姉さんが来て「そ

れ誰のだ」と聞いた。僕はだま

つていた。また「それ買つたぜんこ、どこから出した」と聞いたが、だまつていたら「家さ行くらなあ」と言つて、家の方へ行つた。僕は、おつかなくてばんを食べても味けもなく、のどにつつかつて（つかえて）食べられない。

それから小笠原の井戸のところで食べている」「重雄、來い」と言つた。僕はしぶしぶ家へ行つた。すると母は「んな（おまえ）、それ、どこから出したば（出したんだ）」と言つて、今半分ばかり食べかけたばんを指さして聞いた。僕はだまついたら、母は何も言わずに僕をビタンとたたいた。

僕は泣きながら、今までのことを話してから「こんだから（今度から）、そんなことしないから許してけれ（くれ）」と言つたら、母は「十錢や二十錢の錢、おしがるではないども（惜しいわけではないけれど）、そんな悪いくせがついて、大きくなつてからも、こうならないようにするのだ」と言つて、それから許した。僕は毎年の七日盆にはいつもそのことを思い出すのです。

（大正十五年一月号）

【はたんきょう】スマモの一品種。実は大きく先がとがる。熟すと表皮が赤くなり、甘い。

【七日盆】函館を除く道南の盆は陰暦で行う旧盆のため八月七日をいう。盆行事の初日で、この日に墓掃除などをする。

【十三日にも近い】盆が近いこと。盆は七月十五日を中心にして、祖先の冥福祈る仏事で、江戸時代からは十三日から十六日にかけて行われる。大野の盆は陰暦で行うため八月十五日前後に行い、十三日に墓参りをする。

【七年にも近い】盆が近いこと。盆は七月十五日を中心にして、

盆の十五日でなく、十三日にお墓参りをするのでしょうか。

●自由画選評 山本 鼎

坂東清司君の「秋の田」、まじめな心で描いている。その心はよくわかりますが、絵の効果はよくない。なぜよくないかと

いうに、第一にトーンがないからです。こういう景色でもよく見てごらんなさい。濃いところと淡いところとがあつて、なおよく見ると、その濃淡が物の丸味や遠近や性質を示しているのであることを悟ります。畑の点々など、なかなかいいのです。勉強をなさい。

綴方選評

鈴木 三重吉

六年の金川君の「食ばん」は、

ともかく事実を渋滞なく（とど

こおりなく）、すらすらと書

いています。姉さんに突っ込

まれ、帰つて母さんに叱られ

るので、こわくてパンが咽に

つかえて食べられない。それ

でもうつちやる（投げ捨てる）

し込むところなども滑稽です。

「七日盆」というのは、七月十五日の盆以外の行事でしょ

うか。私たちは初めて聞く地

方語です。「十三日にも近い

ので」は、金川さんの村では、



大野小尋六 坂東清司
(大正15年2月号)

連載
『赤い鳥』に載つた郷土の作文

大正から昭和の初めにかけ、童話作家・鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小児童の作品を紹介します。大野小は当時、木村文助校長が子供たちの綴方（作文）や絵などを投稿し次々と入選。「日本一の綴方学校」といわれました。

馬鹿はつ子(推奨)

ずつと前のことです。一ヶ月

はつ子が来ると、家のお婆さん
がいつでも家に入れて話をしました。
した。話を聞きますと、はつ子
の生まれたのは越中で、二十一（二十一歳）
歳で津軽へよめに行つて、
二、三年たつて子供をもつてから頭が悪くなつたので、家を出
されて、しまいに本当の乞食になつたのだそうです。

怒つて怒つて追つかけて来ます。
そうすると子供が泣くので、また子供の手を引っぱって歩きます。

だん（石段）のところに寝たり、
麴屋の軒下に寝たりしました。
人が言葉をかけても、わからな
いことをしゃべって、おいおい
と泣くばかりでした。私たちは、
はつ子のところへ行つては「は
つ子、はつ子、泣きはつ子、わ
らしじば（子供を）置いて、馬鹿
はつ子」だの、「このわらし、
馬鹿わらし」といつて、からか
いました。

■ことばの意味

〔乞食〕 食物や金銭を人からまんんでもらつて生活すること。また、その人。

【越中】旧国名。北陸道七ヵ国の一。現在の富山県にある。越の国を天武天皇の時代に三分して成立した。

綴方選評

鈴木
三重吉

それから三日目の朝に、また寺へ行つてみると、はつ子が死んだ子供を骨にして来ていました。そこへ丸丁（屋号）のばづちや（お婆さん）が来て、「なして来てらば（どうして寺に来てたんだ）」と聞くと、「寺ぎ、このわらじ埋めてもらてくれたせ

峰下（現七飯町峰下）の人に聞いてもわかりません。しばらくたつて、お寺まいりのとき、麿屋の人が、ばばちゃんと話しているのを聞きましたら、「はつ子のわらし、死んだちもね（死んだそうだね）」といつていました。小さい時でしたが、何だかはづ子がかわいそうになつて、馬鹿にしたのをあとあとぐやみました。

（もらいたくてさ）」といつて泣きました。それから毎日、寺のところへ来ました。そして「死んだわらし思い出せば泣きたくなつてせ（なつてさ）。寺見でなつてせ（なつてさ）。寺見ても、のう（寺を見ても泣きたくなる）」といいました。今はどこに行つているのかわかりません。（大正十五年三月号）

【ことばの意味】
【乞食】食物や金銭を人から恵んでもらつて生活すること。また、その人。

【越中】旧国名。北陸道七か国の一つ。現在の富山県にあたる。越の国を天武天皇の時代に三分して成立した。

【麴屋】麹は米・麦・大豆などを蒸してねかせ、コウジカビを繁殖させたもの。酒・醤油・みりんなどの醸造に用いる。当時はみそなどを自家で製造したので、麹を売る店も多かつた。

五年の吉田君の「馬鹿はつ子」は、はつ子のつれている子供が、どのくらいの年の子供かということが、ばくとしていて（はつきりしなくて）分かりません。これは、全体的感興（興味）の

（つづりかた）

綴方選評 鈴木 三重吉

連載

『赤い鳥』に載った郷土の作文

大正から昭和の初めにかけ、童話作家・鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小児童の作品を紹介します。大野小は当時、木村文助校長が子供たちの綴方（作文）や絵などを投稿し次々と入選。「日本一の綴方学校」といわれました。

どら猫（ねこ）
大野小高二 松原トヨ

私が学校から帰つて、ストーブにあたつていると、間もなく電気がついたので、あわてて水をくみに行こうとする、母が妹のとみに「油買つて来てくれる」と言つて、棚からかめを下ろしてやつたようであつた。井戸に行つて来ると、とみが絵本を見て遊んでいたので、もう買って来たのだろうかと思つて、「はあ（もう）、買つて来たの」と言つたら、母が流し（台所）にいて魚をこしらえていたが、ふりかえつて、とみに「まだいがね（行つてない）。あの何ほど（とみのこと）、まあ早ぐ行つて来いし（来なさい）」と言つて、おこつたら、とみは小言を言いながら、私の大きな長靴をはいて出て行つた。ずいぶんおそいと思って待つ

ていると、ばたばた・らと長靴の音がしてから、妹が戸を半分あけて、「酔ぎやあ？ 油けあ（買つてくるのは酔か油か）」と言つて、泣きそうな顔をしたので、私は、きっと間違つたと思つて、「酔買つて来たの（かい）」と聞くと、私のそばにいた愛子（くれ）」と言つて、棚からかめを下ろしてやつたようであつた。妹は「とみ、油だよ」と知らせた。妹は何も言わないで、めそめそ泣いて家に入らないので、母が立つて行つて、「それ見れ（みろ）、人の言うこと聞かね（みろ）、（聞かないで）、行きたぐねあ（行きたくない）、行きたくねあ（とみ思つて行くしけあ（行くから）。ざま見れ（ざまあみろ）と妹の手から油瓶（ゆびん）をとつて土間（どま）に投げた。父は「入れ、入れ。買つて来たものは仕方ねあ（ない）。今度からすぐ使われればいい（すぐに使いをすればいい）と言つてだました（なだめた）けれども入らないので、

母に戸を閉められた。

私が裏へ杉の葉を取りに行つたついでに、何ほど入れる気になつても（いくら入れようとしても）入らないので、「ええ、あんべ（いいから行こう）、あした（まで）、そこに黙つていいだら、どら猫来るべあ（来るぞ）。ほらほら背中さ上つた」と言つたら、少し後ろの方を見て、入りたいようにしていたが、引っぱれば、がんばつて動かないので、憎らしくて、がん（ごつん）と背中をたたいて家に入った。しばらくたつと、がりがり、さくら（板壁）をかつちやく（ひつかく）音がしたので、わざと「どら猫來た來た」と（言ひながら）、土間へ行くと、妹は「ふん」と少し笑つてなお強くかつちやくので、戸を開けて「どら猫、どら猫」と言つて、妹の手を引つぱつて、むりやりに家に入れたら、むしむしと（黙りこくつて）家に上がつた。少し知らないふりをして見つて、もう愛子と二人で玩具をやつて（玩具で遊んでいた）。

そのことがあつてから、何かすると私たちは、妹を「どら猫」と言つたり、「酔、酔」と言つたりします。

（大正十五年四月号）

■ことばの意味

【土間】昔の家の玄関や台所などの屋内で、床板を張らず地面のままにしてあるところ。

【杉の葉】たき付けの代わりに、まきなどの燃料に火をつけるために用い、葉を拾い集めるのは子供たちの役目だった。

【どら猫】盗み食いなどをするや野良猫のことだが、子供たちにとつては気性の荒い乱暴な化け猫のような猫のこと。

●綴方選評 鈴木三重吉

松原トヨさんの「どら猫」は、叙写（叙述や描写）の陰影のくつきりした、たしかな作品です。妹さんが、しぶしぶ使いに出かけて、途中でまた

伏見馨君の「風景」——いい鉛筆画だが、質朴で少し平板だ。（教育課 八木橋直弘）

●自由画選評 山本鼎
大野小尋六 伏見馨

（昭和二年三月号）

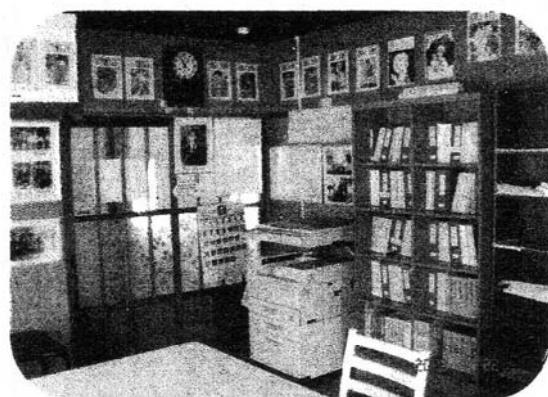


かめを投げつけら

れるところだの、お父さんが仲裁し、なだめられるところや、閉め出しをくわされた妹さんが、入れと言つても、意地悪くすねて、外でがりがりと板かべを引っかりたりしている気持ちや、それに対して、トヨさんが、こにくつたらしくも思いながら、でも半ば以上、かばい守つてやろうとする気持ちなど、すべての推移がいちいちまざまざと生き動いています。演出的に見て、いかにも実感的で愉快です。「杉の葉」というのは、もちろん、たきもの用に蓄えてあるのでしょうか。

赤い鳥・木村文助コーナー

(北斗市郷土資料館内)



函館方面→車で、国道227号に入り大野市街地へ30分

道北方面→車で、国道5号の大沼トンネルを抜け、10分ほど

して大野方向に入って右折し、更に市街地へ進み5分で着く

発行・大野文化財保護研究会
(略称；文保研・ぶんぽけん)
会長；木下寿実夫
○四一一一二〇一
(0138) 77-8535
北斗市本町六八
77.8535



大野地区市街地の大野小学校門
を取り右側木造の建物

偉人テーマに合唱劇

北斗の音楽会実行委

来年の初演を目指す

【北斗】市誕生を記

念してつくられた市歌「永遠にあかるく」を歌い継ごうと、毎年音楽会を主催する実行委が、郷土の偉人、木村文助氏（一八八一—一九五三年）をテーマに、自作の合唱劇を披露しようとしている。合併五年目となる、二〇一〇年の音楽会での初演を目指している。

木村氏は秋田県出身。一九一八年（大正七年）から約十年間大野小校長を務めた。当時としては画期的だった

木村氏は秋田県出身。一九一八年（大正七年）から約十年間大野小校長を務めた。当



合唱劇「よだかの星」が好評を博した「永遠にあかるく音楽会」＝昨年12月

大野小で「生活つづり方」指導――元校長・木村文助氏

た、農村の暮らしを話し言葉で細やかに表現する「生活つづり方」

は年内に仕上げ、来春の曲完成を目指す。出定。

（上野香織）

（上野香織）

演者は来春に募集予

木村氏をテーマにした合唱劇の制作は、昨年十二月の音楽会で演出を担当した市内在住のホームヘルパー中村勝雄さん（六七）が「大野の名を全国に知らしめた木村氏のことを、今

の子供たちに知つても

らいたい」と提案。昨

年の音楽会で宮沢賢治の童話を基にした合唱

劇が好評だったため、

実行委も賛同した。現

在、中村さんが台本づ

くりに励んでいる。

作曲はプロに依頼する必要があるため、資金集めが最大の課題だが、事務局長の前田治さん（五五）は「木村氏のことを上磯地区の人にも知つてもらい、市民みんなの財産としたい」と、実現を目指し張り切っている。台本

【北斗】2008年12月、合唱劇「よだかの星」を上演した「永遠にあかるく音楽会」実行委員会(熊本昇委員長)は、10年の北斗市誕生5周年

の上演を目指し、初のオリジナル合唱劇に挑戦する。テーマには大野尋常高等小学校などでつづり方の指導に全力を注いだ木村文助氏(1882—

1953)を選定。同実行委の前田治事務局長は「市民の心に残る合唱劇を目指したい」と意気込む。

(笠原郁実)

が創刊・編集した童話集「赤い鳥」に数多く入選。前田事務局長は「子どもたちのつづり方に胸が熱くなった。上磯地区の住民にと

来市歌「永遠にあかるく」完成の記念音楽会として同年から活動を続ける実行委は昨年12月、初めて合唱劇「よだかの星」に挑戦し、大成功。メンバーの自信はさらなる意欲へとつながり、実行委内からは地域に根ざした合唱劇誕生を望む声が高まった。



木村文助氏

地域の偉人 木村文助テーマに



北斗市郷土資料館内に設けられた「赤い鳥・木村文助」コーナー。「赤い鳥」復刻版も閲覧できる

市誕生
5周年 来年上演へ

つては、北斗市となつたを目指し練習に入る。この今、地域の偉人を知るよいほか、今年の音楽会は12月機会」と話している。実行委は6月ごろまでに脚本骨子をまとめ、年内に予定している。

20日開催で、昨年に続き宮沢賢治作品の合唱劇上演を

オリジナル合唱劇挑戦

「永遠にあかるく音楽会」実行委